ISSN 0913−7181

Center for Urban and Regional Studies

CURES NEWSLETTER 地域政策研究ニューズレター

金沢大学人間社会研究域 2013. 3. 31 No.100

ニューズレター CURES100 号記念号

特集 地域志高塾北陸地域経済学講座 10 周年シンポジウム

北陸経済の「今」と「これから」 ー北陸新幹線開業を前にしてー

ニューズレターCURESは、1986年10月の創刊以降、本号で100号を数えることになった。この間、多くの研究者、実務家からご寄稿いただき、御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げる。なお巻末には2000年以降の特集タイトルなどを掲載したので、ご活用いただきたい。

また本号では、2003年から開始された北陸地域経済学講座の10周年記念シンポジウムを特集した。シンポジウムでは、2014年度に開業する北陸新幹線の展望と課題、対策などについて能登、加賀、金沢の地域リーダーを招き、ディスカッションを行った。パネリストの民間、行政、金融機関など立場の違いからのコメントは示唆に富む。何らかの参考になればと思う。

金沢大学人間社会研究域附属
地域政策研究センター
センター長
武 田 公 子

100 号記念号に寄せて

当センターのニューズレターCURESが本号をもって100号という節目を迎えることができました。これまでご寄稿頂きました皆様、編集にあたられた先生方、また読者の皆様に心より御礼申し上げます。

バックナンバーを繙いてみますと、当センターの前身である地域経済情報センター、さらにその前の経済学部地域経済資料室の時期に遡ります。創刊号は「地域経済ニューズレターCURES」として1986年10月30日付で発行されており、編集後記には次のような一文があります。「本学部では、創設以来、地域経済に関わる研究と教育を一つの重点として取り組んできました。このたび、その一層の発展を期すために地域経済資料室を整備し、地域経済ニューズレターを発行することになりました。（中略）北陸の問題を中心に…と思っていますが、時には北陸にこだわらず、広い視野から問題を取り上げることもあるでしょう。」当初の記事は、巻頭言の他、時事的な問

特集 北陸経済の「今」と「これから」 ー北陸新幹線開業を前にしてー

100 号記念号に寄せて　金沢大学人間社会研究域附属 地域政策研究センター センター長 武 田 公 子 ・・・①

地域志高塾北陸地域経済学講座 10 周年記念シンポジウム
北陸経済の「今」と「これから」
—北陸新幹線開業を前にして—

主旨説明　金沢大学経済学経営学系 教授 碇 山 洋 ・・・③

話題提供「北陸経済の『今』と『これから』」　株式会社金沢倶楽部 代表取締役社長 山 田 元 一 ・・・③

パネルディスカッション　パネリスト：興能信用金庫 理事長 數 馬 嘉 雄
株式会社金沢倶楽部 代表取締役社長 山 田 元 一
加賀市長 寺 前 秀 一
コーディネーター：金沢大学経済学経営学系 教授 碇 山 洋 ・・・⑥

ニューズレター CURES バックナンバー タイトル（2001 年 5 月〜） ・・・⑯

題を扱ったレポート、研究紹介、他大学等での研究動向等が掲載されており、巻末には「地域経済文献情報」として「経済学文献季報」から地域経済関係分の抜粋や日経データベースからの北陸経済関係記事目録が掲載されています。経済学部内の研究交流、情報提供としての役割を担っていたことが窺われます。57号（2001年５月）からは、本号巻末に示しましたように特集を設けた編集形式になり、その時々のトピックスから時代背景を窺い知ることができます。

また、60号（2002年９月）には、巻頭に碇山洋・地域経済情報センター委員長「地域経済情報センター設立のごあいさつ」が掲載されています。「地域との交流、地域への貢献、それを通じた研究・教育の活性化をいっそう進めるため、このたび既設の地域・経済資料室を拡充し、地域経済情報センターを設立いたしました。」とあります。資料室という位置づけから、さらに外に踏み出したセンターへの展開の第一歩といえます。

89号（2010年７月）には、拙稿「地域政策研究センター発足のご挨拶」が掲載されています。金沢大学が学部から学域に再編されたことに伴い、経済学部の附属センターであった地域経済情報センターから、人文社会科学分野を横断する人間社会研究域附属センターに移行した経緯を説明させていただきました。また、同号には安嶋是晴助教が「地域政策研究センターの沿革と実績」をまとめてくださっているのでそちらもご参照下さい。

なお、センターの名称等は上記のように変遷していますが、ニューズレターの名称はCURES—Center for Urban and Regional Studies—を継承しています。「経済」や「情報」にあたる英語表記を用いていなかったのは、ひょっとしたら当初から、現在のような広い分野を横断させた研究組織への展望があったのかもしれません。27年が経過し、創刊当時に資料室を担っておられた先生がたがどのような想いをもっておられたのか、詳細を知る術はありませんが、バックナンバーから読み取ることができる「地域に関わる研究」「地域への貢献」という理念は一貫して今に至っていると言えます。

さて、今年度はCURES100号の発刊の年であるとともに、北陸地域経済学講座10周年の年でもありました。本号にはこの10周年記念シンポジウムの記録も掲載させていただきました。このシンポジウムのタイトルにもありますように、今年度は「これまで」を振り返りつつ、「これから」を考えていく節目の年となりました。文科省が打ち出してきたＣＯＣ（Center of Community）構想を引き合いに出すまでもなく、大学が地域社会に果たす役割というものが、かつてなく注目される時代となってきた観があります。当センターでも、「研究センター」としての学術的な役割と、「地域センター」としての地域社会との連携関係の強化を同時に追求しつつ、一層の成果を挙げることを求められております。なお試行錯誤を続けている段階ではありますが、この節目からさらなる飛躍を目指して励む所存でおります。

皆様におかれましては、今後とも当センターへのご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

北陸地域経済学講座 10 周年記念シンポジウム

北陸経済の「今」と「これから」

―北陸新幹線開業を前にして―

2012年12月8日　於 金沢市文化ホール

主旨説明

金沢大学経済学経営学系
教授　碇　山　　洋

碇　山：みなさんこんにちは。本日のシンポジウムは、北陸地域経済学講座の10週年を記念して企画しました。この講座は、もともとは石川に来られたビジネスパーソンに地域の特徴を知っていただくことを目的として始められました。実際に開講してみると、地元の方々も多く参加され、地域の文化や伝統が経済にとってどのような意味をもつのかを十分理解しないまま活動していた、という声があり、我々もそうしたニーズに気づかされた次第です。そのなかで、我々スタッフの側も講座の成果を『北陸地域経済学』という本にまとめ、またそれをもとに授業を進めるということをしてまいりました。幸いにも好評をえまして、今年度、10周年を迎えることができました。

さて、現在我々をとりまく環境を見たとき、北陸新幹線が金沢まで開業されるに伴い、それが地域にさまざまなインパクトを与えるであろうことが予想できます。北陸地域経済学講座の節目にあたって、北陸経済の回顧と展望を議論することが必要と考え、このシンポジウムを企画しました。シンポジウムというと堅苦しく思われがちですが、シンポジウムとは本来は酒を飲みながら自由に議論するというのが語源だそうです。今日も、基調講演やそれを受けてのパネリストによる討論というよりは、山田さんより話題提供を30分ほどいただき、それをめぐってパネリストとお集まりの皆さんと自由に討論する場としたいと思います。10周年を契機として新たな形態での講座を展望していきたいと思っておりますので、今回の双方向・多方向の議論を踏まえて、今後の講座の在り方をあらためて考えていきたいと思っています。ですから壇上で議論するだけでなく、参加者の皆さんと議論したいと思っております。私がコーディネーターとして会場に質問等をなげかけますので、ぜひ自由にご発言いただければと思います。

今日のシンポジウムが、今後の講座の発展に繋がることを、また参加された皆様の各分野でのご活躍にとっても有意義なものとなることを期待しております。

株式会社金沢倶楽部
代表取締役社長
山　田　元　一

話題提供

「北陸経済の『今』と『これから』」

碇山教授の提案で、話の題としては堅いのですが、しかし皆様の知的刺激をお互いに発散できるよう、ざっくばらんな時間にしたいと思います。私は今年12月から今年３月まで、石川県新幹線開業ＰＲ検討委員会の審議委員をやっていました。出版業の

経営者をやっているご縁から、行政や地域が開業にむけてどのような取り組みをしているか、またどのような考え方をするべきかを議論する機会がありまして、その関係でいろいろなところで呼ばれるようになりましたので、今日もそれでお声がかかったのだろうと思います。今日は観光学の寺前市長や能登をすみずみまでご存じの數馬理事長も来ておられますので、私が何を言うべきか難しいのですが、皆様のお力を頂ければと思います。

新幹線が来ることによる経済効果やデメリットについてはいろいろ文書やレポートが出ていますし、行政だけでなく観光業から不動産業界まで、一見縁のなさそうな業界を含めて憶測も含めさまざまな情報交換がなされています。そのなかで今日は３点ほど話題提供をしたいと思います。

第一は、新幹線がくるとどのくらい来県者が増えるかということです。九州新幹線が開通して、鹿児島中央駅では前年比160％の乗降客があり、そこから１時間20分ほどのところにある指宿温泉では200％の観光客の入込があるようです。今の情勢で１％２％の数字を伸ばすことが国にとっても自治体にとっても至難の業なのですが、そのなかで60％や100％という伸びがあることが信じられない。2015年開業によって石川に多くの客がこられるでしょうが、しかしその前に果たして観光としての金沢、観光エリアとしての石川・北陸が真に耐えるだけの価値を持っているかどうか。2016年以降開業効果が下がる時点で耐える魅力を持ちえているかどうか。そうでなければ我々は何をなすべきかという投げかけです。

第二には、長野市に典型的に表れていることですが、新幹線が長野まで来たこと自体は悪くはなかったと思うのですが、一部の業界がダメージを受け、たとえばビジネスホテルが５つ廃業したとＮＨＫでも報道されました。百貨店も退店のうわさが出ています。顧客が東京に吸い取られてしまうのですね。消費都市としての金沢、消費地としての石川が、この地元の消費者にとって持つ魅力が問われるということです。ちょっとした買い物、あるいは大きな買い物なら東京に行ってしまえば２時間40分で行ける、日帰りできるとなれば、そちらに吸引されるおそれはあります。金沢でもまちなかのファイブタウンという中心商店街は危機案を持っていますが、さらに予想外のダメージがあるかもしれない。地元にとって魅力ある商業地なのかが問われる。新幹線というのはそういう大きなことを考える契機になります。これはなかなか予測が難しいので、皆様との議論に期待したいと思います。

第三に、エリアによる影響や捉え方の違いです。先日高岡商工会議所の方と話しましたが、新幹線に関しては全く熱が感じられません。イオンモールの近くで新幹線の高岡駅の工事は着実にすすんでいますが、他方で在来線高岡駅前や中心商店街は数年前からシャッター通りになり、大和デパートも夕方６時にしまってしまうのです。新幹線の駅舎はイオンモールの前にできてしまい、商店街が分裂する、あるいは商店街のパワーが分散してしまうような配置になってしまっている。新幹線が開通してもお客はどうせ金沢にとられてしまうしね、という感じです。他方で氷見市では、道の駅や温泉にお客さんが増えています。今の時期氷見湾から立山が清冽な姿を見せています。昔はどんづまりだったのに、なぜこんなに湧いているのかと地元の人に聞いたところ、能越道が七尾まで開通したことによって、東海北陸自動車道とつながったからというのです。氷見は能登の玄関口という戦略的なコンセプトを持ちつつあります。氷見と高岡はわずかしか離れていませんが、こんなに温度差があるのです。

加賀、能登、小松、福井がそれぞれ新幹線開業をどうとらえているかはかなり違います。温度差だけではなく、方向性が違います。開通を機に、わがまちは一体どういう方向に行けばいいのかということ、戦略を模索する動機づけになっていると思います。そうした戦略をもっていないと、人口減少社会に入るなかで、地方都市は生き残れないのです。これを新幹線開業が動機づけていると思います。

氷見は、能登の玄関口という捉え方は、これまでにない光の当て方で、具体的な新たな施策・プランがでてくるのです。各地の戦略が一つの整合性をもって、石川県全体、北陸全体の強靭さに繋がれば

望ましいのですが。具体的なアイディアはすぐでてこないでしょうが、皆さん方のビジネスのなかで、さまざまな起案がでてくればと思っています。

金沢は十数年前には周回遅れのトップランナーといわれていましたが、新しいモデルを作ってきた面もあります。昨日の新聞に出ていましたが、世界の夜景の美しいまちの３位に選ばれたそうです。それ以前に21世紀美術館が兼六園と入場者数を競うようになっています。昨年のデータによれば兼六園の入場者が130万、21世紀美術館は120万人だそうです。もてなしドームは８年目にして金沢のシンボルになっています。何事も百年以上続かないと認められないという金沢の風土のなかで、わずか数年間でシンボルになっている。アメリカのある旅行雑誌が、世界の美しい駅30を選んだのですが、日本から唯一選ばれたのが金沢駅です。さらに、金沢海みらい図書館は、サッカーの中田選手を起用したCMを流していますが、ここは「世界で一番美しい公共図書館25」に選ばれました。その他挙げればきりがないのですが、これらに通底するものは何かというと、世界のなかで十分耐えうる価値をもたらそうじゃないかという思想です。これらはすべて前市長の置き土産です。

一方で金沢は、昔からの金沢にしかないものを大事にし、それで各地から人を集めてきました。観光とはその地域の固有なものに光をあてて見せるということです。金沢には従来からの固有のものがたくさんあります。伝統工芸だけ見ても26種あり、うち20種は後を継ぐ人が２、３人しかいないという希少伝統工芸です。その一方で世界に通用する普遍的な価値のある美術館や図書館をつくり、この両者の大きなウィングのバランスのなかに、いまの金沢があり、これが観光戦略を支える強い骨組みになっていると思います。

そんなことをフェイスブックに書きましたら、山出前市長からお手紙が来ました。あなたがインターネットで書かれた文章を拝読しました、その通りです、よく勉強されてますね、という内容です。私は前市長を知っていますが、山出氏は私のことを知らないと思います。いままで考えていたことが追認されたのは嬉しいのですが、これをどう生かすかは、金沢市民の双肩にかかっていることです。ですが、金沢がもっているこのハード・ソフトの強みを、日本国内だけではなくて、世界に発信して生き残っていけるのかどうか。その絶好のチャンスが北陸新幹線開業によってもたらされるのではないかと期待しています。

私が青年会議所に入った今から20数年前には、金沢は一周遅れのトップランナーで、はっきり言ってレベル低いんだわというようなことを先輩に言われていました。米沢さんという方は、日本の町で東京と異なる独特な魅力を放つ町はおそらく６つくらいしかないだろうといっておられました。すべてにおいて東京がトップ。そういうなかで金沢は独特の魅力を放っていかなければいけないんだけれども、それについての戦略が事実上ない。青年会議所としてもそういう戦略を持つべき時期にさしかかっているんだと。二十数年前の、バブルに入る前にそういう危機感を持っておられたのです。そういう危機感をもつ方がたくさんおられる町、それが素晴らしいと思います。それが全国の地方都市でどんどん顕在化してきたのが現在です。

総選挙の時期ですから政治的発言は控えたいのですが、国からして問題を打開するアイディアがないことははっきりしています。原発、尖閣、ＴＰＰどれをとっても明快に問題を打破するアイディアがなく、議論が噴出している。しかしそれだけで済むわけはない。金沢では議論が噴出するだけではなくて、アイディアの選択肢があるという点でアドバンテージがあると思います。今日は多士済々が多く集まっておられるので、私の話に触発されて発言していただいたり、何らかの気づきがあったり、現状認識を深めていただいたりすればありがたいと思います。

パネルディスカッション

パネリスト：興能信用金庫　理事長
數馬嘉雄
株式会社 金沢倶楽部　代表取締役社長
山田元一
加賀市長　寺前秀一
コーディネーター：金沢大学経済学経営学系
教授　碇山　洋

碇　山：それではパネルディスカッションに入っていきたいと思います。ここでは、なにか意見を集約してまとめるというのではなく、どんどん意見を出していただいて、議論が広がっていく形にしたいと思います。いろいろな意見が出た方が、今後の講座をどう組むかを考えていく上での参考になるということもありますが、短時間で議論の集約点をみつけようとすると、予定調和的な議論になってしまうので、皆さんがそれぞれの課題を引き出せるような議論ができればと思っています。まずはお二人のパネリストに、今の山田さんのお話を受けての感想や触発された点、あるいは質問や反論を含めてご発言いただければと思います。

寺　前：新幹線に対する期待・問題意識は、加賀市民それぞれ期待を込めて持っています。私自身も、加賀市は温泉地でもありますし、敦賀から関西に延伸することへの期待をもっています。山田さんのお話のなかでありましたように、日本全体のなかで新幹線というものは、東京と直結する効果があります。私自身も東京駅がハブ化していると以前から思っていたところです。東北も、北陸も東京駅に繋がるわけです。世界の中の日本、日本を代表する都市としての東京、日本経済を支える基軸としての東京がしっかりしていないと、地方圏も吹っ飛んでしまいます。石川県も、金沢市も、加賀市もそうです。その東京と各地域が結ばれることの期待は大きいのです。加賀市は金沢との関係が重要です。加賀市の観光客がかつての400万人から200万人へと減少しているのは東京とつながっていないという点が大きな要因です。400万人あった観光客をそれでも300万人に食い止めている観光地もあるわけです。加賀も300万まで観光客を増やしていきたいのですが、それには加賀温泉が金沢の奥座敷として位置づけられる必要があります。とはいえ、作並温泉にとっての仙台市、定山渓にとっての札幌、有馬温泉にとっての神戸市と比べると、奥座敷となるべき主要都市として金沢の規模は３分の１くらいですので、そう多くは期待できません。新幹線開業とともに一丸となってどう取り組むかがこれからの大きな課題です。

九州新幹線の話がありましたが、現知事は熊本県知事選のとき、博多と鹿児島の間にあって生き残るには政令都市化するしかないといって当選しました。いまはそれでも苦戦しています。加賀市はストローされるような都市ではないので、プラスしかないと前向きに考えています。富山の話がありましたが、加賀も在来線との併設駅になりますので、人口減少のなかで二つの駅を支えることは難しいことです。京都でも駅ビルに百貨店が入り、そこは大変栄えましたが、他がへこんでしまいました。東京く

らい大きければどこかがへこんでも他で埋め合わせることが可能ですが、石川ではどこかが栄えればどこかがへこむという厳しい状況になると思います。富山について私はやや異なる捉え方をしています。東京からみたときもそうですが、中国や韓国の人から見れば、日本はどこでもいっしょだと思います。観光的な価値があるのは、富山駅からみた立山連峰、アルペンルートは他にない風景です。北陸新幹線を提唱されたのは、佐伯宗義さんという富山地方鉄道の元社長で、衆議院議員にもなり、田中角栄と張り合った人です。この人が総理大臣になっていればとっくに新幹線はできていたのかもしれませんが、結局上越新幹線が先にできてしまいました。この方が黒四ダムの通行権を強硬に主張され、黒部アルペンルート開発を進めたのです。それが今日の黒部アルペンルートや立山の観光を生み出したのです。残念ながらダムができたので蜃気楼が見えにくくなっていますが、これが復活すれば世界の人が見に来てくれると思います。加賀温泉郷の観光地としての最大のライバルは富山だと思っているくらいです。

新幹線効果は料金次第だと思います。新幹線は年間1200万席で、飛行機の４倍の人を運びますから、料金設定によっては多くの集客が期待できます。ＪＲ東日本は経営状態がいいので、観光的に魅力ある料金設定にしてくれるのではないかと思います。しかしあまりに安くしてしまうと金沢がストロー効果で吸い取られてしまいます。全体がプラスでも業界によってはマイナスになるところも出てきます。例えば中央線で東京から甲府まで「かいじ切符」というのがあるのですが、この料金を決めるときにいろいろな影響が検討されました。安く設定すれば甲府の人は喜びますが、バス会社がつぶれてしまうし、大学や百貨店の立地まで影響が及びます。いずれにせよ新幹線はいろいろな意味で影響があります。商売によってはマイナスもありますが、北陸経済にとっては確実にプラスですから、これをどう確保していくかが課題です。

數　馬：信金の理事長になって２年目の新米ですが、その前に「能登ネットワーク」というＮＰＯで活動してきましたので、今日はそちらでの経験を踏まえて話したいと思います。高岡や氷見の話が出ましたが、能登は氷見に近い形かなと思っています。新幹線より能越道開通の影響の方が大きいです。能登については二次交通の話が切り離せません。のと鉄道が穴水まで来ているほか、ＪＲのしらさぎやサンダーバードが和倉温泉までそれぞれ一日３本ほど来ています。これらの足がどこまで充実するかが、新幹線の二次交通として重要です。しかし奥能登についていえば、鉄道の便もありませんので、どうやって金沢まで来た人を奥能登まで呼び寄せるかという課題があります。新しい交通手段ができて、一日２万人のお客が金沢まで来る。この人々にどうやって奥能登まで来てもらうかということです。

能登ネットワークは、能登空港や能越自動車道ができてもできなくても能登を活性化しようという取り組みをしてきました。そこで重要と思ったのは広域での取り組みです。行政の枠組みを超えて、東京からくればみんな能登としてひと括りだろうと考え、能登の商工会・商工会議所が一緒に取り組んできました。そのなかで、特に食を切り口に展開することを考え、特に発酵をテーマにして、いしりや地酒に光を当てて能登を知ってもらうという取り組みをしてきました。

能登といえばまだまだいいイメージがありますし、石川よりも知名度は高いと思います。世界農業遺産に認定されたことを追

い風に、何とかお越しいただける地域として、能登が横につながって取り組むことが第一と思っています。

碇　山：今のお二人の話をうけて、もう一度山田さんからご発言ください。

山　田：寺前さんは官僚・大学教授・ＪＴＢ顧問という肩書で、国土政策に関して高い見識をお持ちだと思います。我々にはマクロな観点が欠けているきらいがあるので、ぜひ、世界から見た北陸、石川、日本全体からみた北陸、石川についてご意見いただけると面白いと思いました。數馬さんは能登への愛情が全身からにじみ出るお人柄です。能登は昭和の時代から人口減に直面し、そのなかで悪戦苦闘されているので、その経験から参考になることを話して頂ければ。今のところ金沢はまだ人口が増えていますが、それは周囲から吸い上げているだけで、近々限界になるわけですし。

碇　山：山田さんからお二人にさらに深めて話していただきたいことを挙げていただきました。寺前さんにはマクロからみた北陸・石川、數馬さんには人口減少の先進地域からの教訓というところをお話いただければと思います。

寺　前：世界についての話は難しいですね。北陸ということで話をさせて頂ければ、そもそも北陸新幹線が金沢まで止まってしまったら、線路を通す意味がなく、国費が無駄になると思っています。関西まで繋がってはじめて国費を投じた意味があるということです。その際、金沢を焦点にすえてどう考えるか。新幹線沿線のルートについては議論が分かれていますが、つまるところ米原ルートが一番建設コストが安いですし、石川は現在でも名古屋との関係が強いわけです。加賀温泉でも中京の客が２割を占めています。市長としては米原ルートを主張しています。リニアができれば東海道との分岐点が米原になるわけですから、中京経由で東京に向かうようになります。他方、京都と繋がるということは、京都と競争しなければならないということです。金沢は小京都と呼ばれてきましたが、最近は小京都ではないと言って、独自性を強調しています。同じようにリトル東京ではだめです。私も幼少時に金沢にすんでいましたが、最近は表参道の真似みたいな町になってきてしまったという印象を持っています。

金沢駅は、東京から来た人が到着するときでなく帰るときに見る形になっています。なので、小松から入ってもらって加賀を通り、金沢駅から帰ってもらうというのがいいと思います。富山をどうすればいいのかはわかりませんが、富山の駅前には建物を立てずに、立山連邦がよく見えるようにした方が良いのではないかと思います。加賀も白山がよく見えるように駅を工夫すべきだと思っています。つまり、駅が町のイメージをつくる面が大きいのです。

人口減少のなかで加賀の人口は小松に吸い上げられ、小松は能美に吸い上げられ、そして金沢は能登から吸い上げています。しかし金沢も東京に吸い上げられています。金沢は魅力ある都市であり、消費都市でもあります。富山や福井との違いは、雑貨が東京と双方向で動いているということです。金沢港は輸入港で、中国から雑貨が入ってくるのです。輸入は消費物資ですから、消費地に近い方がいいのです。金沢港は他の日本海側の港と比べて、やはり消費港として生き残っていく可能性があります。

他方で、車が運転できない高齢者が増えてきます。そうすると山間の不便なところに住む高齢者は生活しづらくなります。日本では郊外の整備が遅れていると思いま

す。これからは田舎の価値をどう高めていくかが問われますし、加賀市もそれで試される時期だと考えています。

數　馬：これまで取り組んできたテーマの一つが「醸し」です。能登は発酵食品が多くあり、能登杜氏もいて、総持寺や三十三観音などがあり、心を醸す土地でもあります。そこで、いしりをＰＲしようということで、平成12年には魚醤フォーラムを開いたり、能登空港開港の年には上野から７両編成で地酒列車を走らせ、能登杜氏と語るイベントを実施したりしました。東京から来て頂いて、能登でおいしものを食べてもらうという取り組みです。また商工会ではＪＡＰＡＮブランド育成支援事業に採択されて、いしりをニューヨークで発信するという取り組みもしました。能登は発酵食品のふるさとという展開ができないかと考えました。現在は、鶏糞を発行させて堆肥をつくり、それでしいたけ栽培の熱源を確保するというプラントに取り組んでいます。発酵という切り口で能登らしさを演出できたらと考えています。塩麹がブームになったのも追い風ですし、昨日はISICO（石川県産業創出支援機構）で発酵食大学を能登でやらないかという話もでました。

能登では人口が減少していますし、訪れる人も輪島朝市では300万から100万人までに減少しています。交流人口をまず確保していくしかないと思います。そこで、ひとつは発酵を切り口に、そして能登の最大の魅力である人に焦点をあてて交流を促すことを考えました。「能登人（のとびと）」という本もつくりましたし、「能登人と過ごす能登時間」というプロジェクトもやっています。カヌーをしている人、ガラス細工をする人等、地域で頑張っている人が能登には豊富にいます。こうした人々を東京とつないで交流人口ができないかと思っています。

一方で、江戸時代には能登は修行の場、巡礼の地とされてきまして、三十三観音がありました。これが一時期は忘れられようとしていたのですが、地方史家の先生にこれについての本を書いていただき、再発見しようという取り組みをしました。団塊世代の人々がゆったりと三十三観音を旅しながらおいしい食を味わってもらえればと考えているところです。

碇　山：ありがとうございました。さて、ここで会場の皆様からご発言を頂きたいと思います。どなたからでもお願いします。

フロア１：昨年出先から金沢に戻ってきた者です。お話では一見さんというか、観光客を相手にビジネスを考えておられるようですが、私は逆のことを考えています。それは、我々がどんどん東京に行ったらいいのではないかということです。そういうとストロー現象だと言われそうですが、金沢が住みよいまちであれば戻ってくるはずです。従って、金沢を住みよい街にすることが第一です。例えばふるさと納税のような仕組みで、東京で仕事をしているひとから税金を金沢に吸い上げればいいのです。東京から来る人に迎合していると、町の深みがなくなっていくような気がしています。考えてみれば、駅から香林坊の沿線には文化的資産は何もありません。文化や伝統・歴史をよりアピールし、我々自身が住みやすい街にしていくことが第一ではないかと思っています。

フロア２：白山市の商工会議所にいますが、新幹線開業は白山の経済にとって、プラス面とマイナス面があると考えています。企業立地促進という面もあり、交流人口の拡大もあるでしょう。中でも私は、観光・交流人口に関して発言したいと思います。観光に関

する私の印象としては、総花的でありながらそれぞれの地域で単発的にやっており、相互連携が弱いと思っています。むしろ核となる観光地を前面に打ち出すべきではないかと。観光の資源、施設、交通アクセスの三条件がそろっているのは金沢です。まず金沢にいらっしゃいということを、能登も加賀も連携して全国に発信する必要があると思います。そしてそこから各地域に顧客を引きこんでいくという形が必要だと思っています。それぞれがばらばらにやるのではなく、連携する必要が大きいと思います。

フロア３：白山市に住んでいる者ですが、一昨日・昨日、信州に行ってきたところです。特に新幹線が開通する飯山市と、ちょっと離れた白馬村です。そこで行政や観光関係の方にじかに話を聞いてきました。長野オリンピックが終わった後、スキー客がかなり減少しており、地元は危機感を持っています。宿泊施設が多いところほど危機感が強く、生き残りをかけています。新幹線が延伸したら、終着駅に経済効果が集中的にいくでしょう。しかし長野県では、途中下車してもらうために、魅力あるメニューを掲げようとしており、信州の観光を一元化して、それを行政が支援する形をとりつつ、広域連携を重視していました。白馬も山しかないところで、新幹線から離れていますが、魅力ある集客をするにはどうするかを真剣に考えています。

もうひとつ、軽井沢から富山の間で連携するという話があります。富山と白馬では距離がありますが、富山の持つ資源と空港に魅力を感じ、相互に二次交通を検討しているのだそうです。かなり広範囲に連携が進んでいるのだなあという印象を受けました。

さらに、長期滞在をしてもらうというプランも工夫しており、観光庁もそれを推進しています。３か月というような長期滞在もあるそうです。石川では、能登・金沢・加賀というエリアのなかで、県内連携を深めつつ、もっと大きな戦略を考えるべきではないかと思います。

碇　山：第一に東京に行くという流れの有用性という発言がありました。これは後に回しまして、後者お二人の発言について、パネリストのお話をいただきたいと思います。まず、総花的・単発的な取り組みの問題、次に、危機感の問題や取り組む主体のあり方、広域連携に関する問題提起があったと思います。

山　田：県が考えている施策は、開業に向けてアイドリングしているところです。議会で予算審議が始まっていますが、開業効果が消える2016年以降をどうするかも念頭にあります。スローガンは「石川百万石物語」というものです。つまり、金沢に来る人を、どのように能登や加賀に流すかということへの配慮が見え隠れしています。加賀市長という立場では言いにくいかもしれませんが、むしろ寺前さんに県のスタンスに対する意見を聞きたいところです。白馬の例はとても参考になりました。ひとつひとつの町が新幹線を異なる捉え方をしているということの好例で、これを金沢の人はもっと知るべきです。高岡、砺波、福井の人がどう考えているのかを見極めるべきです。みんながウェルカムではない、温度差もあるのに、これをざっくりやっているという状況です。

寺　前：ビジネスでは利害得失それぞれ異なりますが、観光政策も矛盾を孕んでいます。加賀市の人は自分の居住地を言う時に、「加賀市です」とはいわず「山代」「山中」と言うく

らいで、そのくらい利害が異なります。観光は、他と違いアナーキーなところもありますが、政策は税金を使うので、均衡や公平性を重視する必要があります。従って政策としては能登に力を入れるのは当然のことです。金沢だって遅れた所と進んだところがあります。今日、外環状線を車で走ってびっくりしたのは、駅前と県庁とどちらが進んでいるか遅れているか、簡単に言えなくなってきているということです。政策というものは、恵まれないところに重点的に資金配分するものです。地域間競争でやっていかなければいけないところもあるので、強みを出していくことをします。しかし、どこが強いのかはマーケットが選ぶものです。この判断を誰がするのかが問題です。

加賀市長としては、マーケットをどこに絞るかが大事だと思います。東京の成熟世代の女性をターゲットにしてやっていこうじゃないかと私は言っています。総花的という批判もその通りですが、行政がやるのは力の弱いところを支えるということです。

北陸新幹線について言えば、金沢が暫定的に終着駅です。東海道・山陽新幹線が延伸するたびに終着駅が変わるという歴史を、他の地域でも繰り返してきました。一時期経済効果があっても、延伸によってそれが消えていくおそれがあるということです。

碇　山：ありがとうございました。それではフロアからのお一人目の発言に関するコメントを山田さんにお願いします。東京に出て行くことにもメリットはあるのではないかという点についてです。

山　田：私は、金沢は面白いけど変な街だなと思ったことがあります。『金澤』は観光客向けではなく、住民向けに作っている雑誌です。発刊して11年目にさしかかっていますが、全く儲かりません。金沢は成熟した大人の消費文化をもっている町、というマーケティング要素を持っていますが、それは武家文化の流れがあるのだと思います。こうした金沢のいいもの、文物は大人にならなければ享受できないものです。少子高齢化時代に入り、大人が増えてくる、その結果60歳以上の人がもつ金融資産が国民資産の多くを占めるようになります。大人が享受する文化、という戦略があると思います。

他方で日本が海外に打って出る文化があるとすればクールジャパンですが、それは漫画やアニメというお子様文化です。歌舞伎等は大人向けですが大衆的な文化ではない。外で売れているソフトカルチャーは子ども向けの文化です。逆に大人向けの文化は海外から日本に入ってきている。金沢がもっているものは大人の文化消費に耐えられるものではないか、というのが我々の提案です。これは金沢倶楽部がよそ者がつくった会社だからできること思います。金沢がハブ化する可能性だってあります。「金沢に住むという選択」ということです。2030年以降の金沢の戦略として十分傾聴に値すると思います。この近くで外国人向けの日本旅館がありますが、最近かなり宿泊客が増えているそうです。こうした宿泊客が金沢を拠点に京都や広島に行ったりしている、つまり金沢をハブとして日本のあち

こちを見て歩けるということです。しかしそれは当面する金沢の戦略では無理かもしれません。

寺　前：住んでよし、訪れてよしという都市の在り方は面白いと思います。観光立国推進法の理念は、外国から人を呼ぶというコンセプトです。しかし同時に、外からの評価を受けることで、自分たちが住んでいるところはいいところだという誇りを取り戻そうという点にもあります。自分の住んでいるところに誇りをもつために、外からもっと人を呼んでこようというのが、観光立国基本戦略です。

加賀では宿泊する観光が定着しています。ゴミを落としてもいいから外から人を呼んでくる。それは、子どもたちにそれだけ外から評価される土地だと言えるように、ということです。

碇　山：數馬さんも東京の大学に行って、東京で就職し、そして戻ってこられた方です。住むことに誇りの持てる地域づくり、訪れる人を歓迎する、ということをご紹介ください。

數　馬：東京の人たちと「血の繋がらないいとこ」の付き合いをするという取り組みをしています。まずはこの地に住む自分たちが一緒になっていろいろなことに積極的に関わっていかなければ誇りももてないし、住んで楽しくない。住んで楽しくしていれば外の人もそれを価値として認識してくれるだろうと思います。私も中学高校と金沢にいました。適当に都会で適当に緑も文化もあって、成熟した大人の町だと思いました。軽井沢が富山と組んで、空港を視野にして広域連携をしているという話は面白いと思いました。ただ、民間の我々が何をするかが重要だと思います。富山の銀行の理事長と話をしたときに、富山と金沢を組み合わせた旅行、そこに能登で1泊というような組み合わせをという話が出ました。行政だけでなく、民間もそれぞれのところで少しずつでも動いていかなければと思っています。

碇　山：「民間で」という話が出ましたが、寺前さんどうでしょう。国交省におられて、今は市長という立場で、民間の活動を見ていて感じられるところはありますか。

寺　前：石川は恵まれた地域だと思います。客単価が高いです。ＪＲに勤めたこともありますが、東北方面に比べると恵まれていますし、民度も高いと思います。観光に関わっていていつも矛盾を感じるのは、たえず刺激を喚起するようなことをせざるを得ないのですが、他方で心の安らぎを得たいと思う面もあるということです。低カロリーのものを食べてゆっくりしたいと思いますが、しかし観光としては豪華な食事をたくさん出したいということになります。ですが観光はアナーキーであるべきだと思っていますし、だからこそ若い人々にもっと関わってほしいと思っています。

碇　山：では、講師の皆さんから、会場の皆さんに投げかけたい問題があるかと思いますので、それを発言していただきたいと思います。

山　田：その前に、民間の話をもう少し追加したいと思います。民間は今厳しい状況で、景況判断もマイナスになっています。そのなかで3年後の新幹線は浮揚するエレメントとして受け止められ、それがいろいろな業界に広がっていると思います。私自身、来年の1月末までに新幹線関係の講演が4本ありまして、新幹線への期待がいかに大きいかを感じているところです。しかし設備投資をやって観光資源を整備する時代は終わ

りました。加賀温泉郷では2000年ごろまでは銀行からお金を借りて設備投資をしていましたが、今はそうではなくなっています。今は法事・女子会・卒業旅行というのが増えており、消費者の行動が変わっています。一泊朝食つきのみで、夕食は旅館ではいらない、むしろ橋立でカニを食べたいという顧客も増えています。こういう消費者の選好に則してプロモーションを変え、商品を組み立ていてくことが求められます。能登島にはイルカが住みつき、それを間近に見ることができますが、最近は大学の合宿のメッカになっています。大学の陸上部が合宿して、信号がなくていい、アップダウンがちょうどいい、ということで好評です。能登島は何も投資していないのですが、光の当て方が変わっただけで価値が変わったという事例です。金沢も光の当て方でなんぼでも変わります。市民が思いこまないことで、新たな市場・価値が生まれるでしょう。それは行政ではなく、民間の仕事です。行政にアシストは求めても予算は求めない。補助金を当てにしたイベントはどんどん減っています。金沢スイーツフェアというのがありましたが、補助金がなくなっただけで中止になってしまいました。浅野川園遊会も同じです。自立型で、民間だけで回っていくようなイベント・企画をいかに作っていくかが課題です。行政はそういうのを一番応援したいのだそうですが、民間も考えていかなければと思います。

フロア４：私は10年前に東京からＩターンで移ってきました。移動の理由は仕事があったからということですが、同時に金沢が魅力のある街だからです。金沢が発展していく上では、金沢の価値をさらに磨くということと、仕事を生み出すということが必要です。若い人にも同じことが言えますが、今後雇用を考えていく必要があるということを申し上げたいと思います。

フロア５：山田さんの問題提起のなかで、世界の中で耐えうる価値をつくっていくというお話があったと思います。それと雇用の話と関わってのことですが、金沢らしさという固有の価値と、世界に通じる普遍的な価値とを両立させていくという問題提起に関心を持ちました。他方で金沢を観光の町、消費の町と位置付けることには疑問があります。繊維や機械等の製造業が金沢を支えてきたのですが、現在ものづくりが衰退している状況にあります。消費で測ってみれば、せいぜい人口規模に比例したくらいの可能性しかない。金沢を消費文化だけでなくいかにして生産都市として再構築できるかが課題だと思います。価値づくりの生産、新しいビジネス・産業システムの在り方をどうイメージしたらいいのでしょう。広告代理店業のような情報発信も考えられますが、どのようなビジネスと関連付けたら、雇用に繋がるのか、お聞かせいただけるとありがたいと思います。

フロア６：補助金がないと事業ができないという人が多いのが現実だと思います。他方でお金をかけずにやっていくという人もいます。補助金がつかなくても何か前向きなことをやってみようと。行政は後者を重視して支援したいのですが、実際はしがらみがあったりして前者を支援せざるを得ないという面もあります。行政の職員は首長と同じ立場でやっていきたいと思っているので、市長にはそれを明確に発言していただければと思いました。県内では融資残高がどんどん減り、設備投資も減少しています。市場ということでは金沢のハブ化の可能性として、世界の中の東京、日本のなかの金沢、という観点からのビジネスマッチングや連

携の余地がまだあるのではないかと思います。連携の難しさもあると思いますので、市長の考え方を聞きたいと思っています。

碇　山：では先に寺前さんから、補助金のこと、連携のことについてお願いします。

寺　前：総選挙でも争点となっている地方分権改革という観点から話したいと思います。ビジネスパーソンが金沢に来るのは県庁があるからです。財源は東京にあり、そこから県庁経由でお金が落ちてくるわけです。お金が落ちるから仕事ができて人が住むのです。県庁から遠い地域では人が増えないという構造になっていると思います。どこまで基礎自治体に権限を与えるのかは難しいですが、実際は県にお金がおりてくるからその地元が栄えるのです。

補助金は政策目標に対して対価を払うというものです。政策が先にあって、それにお金が必要だから払うのです。他方で、強制するためのお金というものもあります。要はその権限を国・都道府県・自治体のどこが持つのかということです。市長としては、基礎自治体が大事だというだけでなく、住民の民度に自信を持っていいのではないかと考えています。市長にもトライアンドエラーを認めて頂ければと思っています。

碇　山：雇用についての発言がありました。また、価値の生産、ものづくりについての発言もありました。これらに関わって山田さんからご発言願います。

山　田：韓国が還流ドラマを輸出産業としえたのは、国家機関の力があり、行政が世界を意識した結果だと思います。韓国が世界を取り戻すという戦略でやっている。今ではサウジアラビアからパリまでを市場の射程にしています。この種のマーケットを最初に作ったのは日本の「おしん」でした。「おしん」の脚本を書いた橋田壽賀子さんは、ブルネイで国王に出迎えられるほどのエンターテイナーだったのです。今や韓国がこのマーケットを手にしており、国が取り組んで世界のトップクラスを集めています。ただ芸能界はあまりお金にならないという限界があります。

他方、輪島には海女の組合があり、100人くらいの海女さんがいます。これは儲かるからです。海女がとったアワビとなれば高価に売れる。つまり、お金が儲かるところに若い人は来るのです。

日本の家電メーカーが二流になってしまった現在、ものづくり再生はかなり難しくなっています。金沢にその基盤があるかというときわめて疑問です。イタリア型にして、裾野が大きくなくても付加価値が高い分野に重点化する。この戦略では利益率が高く、土着でできるというメリットがあります。ルイ・ヴィトンのバッグは15-20万円で売られていますが、要はビニール製であって原価はごく低いものを、大きな付加価値を付けているのです。そういうビジネスでないと、少子高齢化が進む中で生き残れないだろうと思います。金沢では伝統文化がありますから別のメソッドがありうると思います。これは『デフレの正体』という本で藻谷浩介氏が書いていることですが。

碇　山：まだまだ議論したいところですが、そろそろ時間になってきました。最後にパネリストのお三方にひとことずつ発言をお願いします。

數　馬：厳しい中で能登がある、カラ元気だとは思いつつ、動いているうちに元気になるという面もあります。100円のものを1000円で

売る、限られたものを売るには物語や雰囲気を付け加えて売る、能登はそれしかないかと思っています。また皆さんから能登のイメージについてお聞かせいただければと思います。

寺　前：フロアへの質問です。今年になって加賀温泉に泊ったことのある人はどのくらいいまか。まず金沢から来ていただかなければと思っています。

山　田：このような席に呼んでいただき、市民の方々との交流の機会を得て有難く思います。金沢は市民が意見を持って発信できる町だと思います。

碇　山：市民的に議論していくというお話がありましたが、今後の金沢・石川・北陸のあり方を今後も広く議論していくことが必要だと思いました。本日は長時間にわたりありがとうございました。

ニューズレターCURES バックナンバー タイトル（2001年5月～）

1986年10月に創刊されたニューズレターCURESは、今回100号を迎えました。紙面の都合もあり、特集タイトルが組まれるようになった2001年５月以降の発行号のタイトルと発行日を掲載いたします。

なお関心のあるものは下記アドレスからダウンロードできますのでご利用ください。

金沢大学学術情報リポジトリKURA（http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/）

号数	発行日	特集タイトル
57号	2001. 5.30	情報公開法を問う
58号	2001.10.30	続発する石川の牛乳食中毒事件の社会的背景
59号	2002. 5.30	市町村合併を探る ― 地方自治の原点とは ―
60号	2002. 9.30	食の流通と安全を考える
61号	2002.12.25	新しい日韓・日朝関係と環日本海地域の課題と展望
62号	2003. 3.25	グローバリゼーションの中の地域金融
63号	2003. 6.30	中心市街地の再生～金沢から考える
64号	2003. 9.30	内灘闘争 50 年 ― 明日の地域に問いかけるもの
65号	2004. 3.20	北陸企業の北東・東アジア展開（その１）
66号	2004. 7. 5	地域経済活性化と地方大学文系学部（その１）
67号	2004. 8.25	北陸企業の北東・東アジア展開（その２） Ⅰ 能登半島・新時代―その可能性と課題を読む Ⅱ 地域経済活性化と地方大学文系学部（その２）
68号	2004.12.20	新潟・福井豪雨から考える水害対策
69号	2005. 3.25	もうひとつの世界、もうひとつの生き方
70号	2005. 7.31	子どもと育ちあう地域
71号	2005. 9.30	若者の就職・就労を考える
72号	2006. 3.31	コミュニティの現代的活性化と地域の生活
73号	2006. 8.31	最近の「景気回復」と地域金融
74号	2007. 2.28	地域づくりと観光を紡ぐ
75号・76号	2007. 3.31	持続可能な地域づくりと地域資源としての大学 ― 地域経済研究・教育・連携サミット in 金沢 ―
77号	2007.10.20	夕張問題と地域・自治体
78号	2008. 1.20	能登半島地震からの人間復興
79号	2008. 3.25	戦後史のなかのアジア・太平洋戦争
80号	2008. 3.31	競争社会条件の再生と持続可能な社会への課題
81号	2008.12.10	バイオマスエネルギー　その１ ― 地域社会の視点から ―
82号	2009. 3.20	バイオマスエネルギー　その２ ― バイオ燃料の問題点と可能性 ―
83号	2009. 3.25	地域の知 ― 隠れた資産を生かす ―
84号	2009. 3.31	ワーク・ライフ・バランスと地域社会
85号	2009. 8.31	世界不況をどう見るか
86号	2009.12.25	大学と地域との連携
87号	2010. 3.25	学生が考える貧困問題・反貧困
88号	2010. 3.31	住み続けられる地域を創る
89号	2010. 7.31	大学と地域社会 ～ 地域政策研究センター開設記念号 ～
90号	2010.11.30	日本と地域の食を考える
91号	2011. 3.10	歴史的資産を活用したまちづくり
92号	2011. 3.31	地域の健康づくりとソーシャルビジネスへの展開
93号	2011. 9.10	伝統産業の現状と再生戦略
94号	2012.2.15	シンポジウム　東日本・スマトラ・四川の経験から考える 「住み続けられる地域」に向けた復興・再生
95号	2012.3.15	東日本大震災の復興支援
96号	2012.3.31	里山漁業のこれからの展望
97号	2012.7.31	就職問題が問いかけてくるもの
98号	2012.10.20	地域エネルギー問題を考える
99号	2012.12.31	地域の居場所づくり
100号	2013.3.31	ニューズレター CURES100 号記念号 地域志高塾北陸地域経済学講座 10 周年シンポジウム 北陸経済の「今」と「これから」～北陸新幹線開業を前にして～

地域政策研究ニューズレター第 100 号　　2013年3月31日発行

発　行／金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター　金沢市角間町（〒920－1192）☎(076)264－5438
編　集／地域政策研究ニューズレター編集委員（平田透、武田公子、安嶋是晴、小熊仁）
印刷所／金沢市中村町28－14（株）谷　印　刷　　☎ 076－242－7267